

# 京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第2号

## 目次

こういう日が やっと来た

- 京都大学大学文書館の成長を祈って -  
寺崎 昌男 ……………2

大学文書館の重要性

梶本 興亜 ……………4

京都大学大学文書館に着任して

- この1年と今後の課題 -  
保田 その ……………6

データで見る京都大学の歴史：

教職員数の変遷 ……………8

大学文書館の動き：

「大学アーカイヴズに関する研究会」を開  
催しました ……………9

日誌 ……………10

資料提供のお願い ……………11

ある回想

- 「戦後大学改革」をめぐって -  
西山 伸 ……………12



理工科大学純正化学教室本館



理学部化学教室本館

1898(明治31)年に創設された理工科大学の純正化学科は、当初本部構内の東側、現在の工学部1号館のあたりに教室が置かれた(写真左上)。その後、1914(大正3)年の理工科大学の理科大学と工科大学への分離(のちの理学部と工学部)とともに、本部構内北西部、現在の工学部4号館のある場所にレンガ造りの本館が建てられてそこに移った(写真右下)。現存する工学部土木工学教室の西隣であり、2棟並んだ赤レンガ建築は、当時の大学を象徴する景観を作り出していたであろう。(4頁に関連記事)

# こういう日が やっと来た

- 京都大学大学文書館の成長を祈って -

桜美林大学大学院教授・東京大学名誉教授 寺崎 昌男

去る2月20日、諸大学から京都大学大学文書館に大学史関係教官が集まり「大学アーカイヴズに関する研究会」を開いた。それに先立って、楽友会館一階の書庫を案内していただいた。

筆者は一行の最高齢に属する。足許を心配して下さる向きもあったかも知れない。でも勇んでついて歩きながら、心中何度もつぶやいた。「こんな日がやっと来たのだ・・・」。

できたばかりの書棚群は、すべて木造である。厚さ2センチ強はあろうという底板にはトガの集成材が使われている。どれほど重い文書が載ろうとも撓<sup>たわ</sup>みそうにない。

職員の方の話では、部材と部材との間はすべてホゾとくり抜きのホゾ穴とが組み合わせであり、柱埋込式棚算工法という伝統技法なのだという。釘も金板も一切使われていない。「昔は町屋でもこれが普通の工法だったのですが、今は宮大工の作業を除けばほとんど使われないそうです。つくった人は、久しぶりに町屋3軒分ぐらいの仕事をさせてもらったと喜んでいました」。「そのかわり、材木に穴を欠き込む作業は大変で、腱鞘炎になりかかったそうですよ」。

すでにかかなりの非現用の公文書が配架されている書棚の間をめぐりながら、「国立大学の中でこんな説明を聞くなど、夢ではないだろうか」という思いに浸っていた。棚板の全長は2,283メートルになるという。当分は大丈夫である。

「文書館建設」という目的に即した、見通しに満ちた配慮と工夫がなぜ生まれ得たか。

先ず、大学の明確な意思があったからである。行政文書を責任をもって保存し、かつ活用してゆくという意味である。それだけでは

ない。その意思を支える教官と職員のエネルギーがある。そのエネルギーが職員の方たちに共有されている。国立大学のなかでは稀にみ



る奇跡に思われた。もちろん、同窓会その他の協力も、不可欠のものだったに違いない。

筆者は、京都大学における大学文書館の開設は、日本の国立大学における、いや、公私立大学を含めた日本の近代大学の歴史における、画期的な出来事だと書いたことがある(明治大学大学史紀要『紫紺の歷程』第5号、2001年5月)。まだ大学文書館が発足したばかりの時期だった。決してほめすぎではないと信じてきた。あれから1年しか経っていない2月の施設見学は、改めてそれが間違いでないという確信を得させてくれた。

日本の大学には文書館(アーカイブス)が必要だ、それは図書館(ライブラリー)、博物館(ミュージアム)と並んで、世界の近代大学の必置機関なのだ——こう唱え始めてから20年にはなるだろう。その意見が通るまでには長い年月がかかった。

筆者たちだけではない。若い研究者のなかには賛同してくれる人が次第に出てきた。他方、アメリカ・ヨーロッパの諸大学への留学や在外研究の際、アーカイブス、アルヒーフなどのお世話になった人文・社会科学の教授たちも、潜在的な同調者になってくれた。

やがて、各地の国・公・私立大学で創立百年史や五十年史などの編纂が始まると、それ

に駆り出された広報課や総務課といった部署の職員の人たちが、学内に歴史資料がない、収集はおろか保存もされていない、ということに気づき始めた。彼らと教員との大学史編纂者の協議会が西日本と東日本につくられ、やがてそれは全国組織になった。

さらに、1991年以降、大学の自己点検・評価活動が努力義務化された。建学の精神や歴史をまとめておけるかどうかは、最も息の長い自己点検・評価のメルクマールになる。そのためには少なくとも史料室ぐらいなくては済まない。こうして大学、特に自己点検・評価の波に直面した国立大学には、アーカイブスの必要性が次第に醸成されてきた。

つまりアーカイブスは、近代大学理念の側からでなく、実際の(行政上の)必要性の側から、少しずつ見直されてきたように思われる。

ただし伝統的な私立大学は違った。福沢諭吉、大隈重信、新島襄といった高名な創立者を持つ私学では、早くから関係文書の研究や集成が図られていた。そうした大学の多くは、何らかの文書館を持っていた。国立は、遙かに遅れをとっていたのだ。

京都大学大学文書館の出発は、こうした遅れを一挙に取り戻す意味を持っていた。だがそれだけではない。それは新しい時代の大学のミッションと関わらせて構想され、またミッションに即して、つくられたように見える。

第一に、大学のアイデンティティが今ほど求められるときはない。国立大学は設置主体すら変わろうとしている。「京都大学とは何か」。それを尋ねる史料さえないようでは、話にならない。

第二に、情報公開法がある。少なくとも公の機関である大学、特に国立や独立行政法人にとって、大学内情報の公開、地域の行政情報公開と連動した情報公開が義務化され、それが不可能なようでは責務を果たせない時代になってきた。

第三に、自分のいる大学とは何かを求める声は、教職員や卒業生だけでなく、在校生の

間にも高まっている。

こうした要請は、確実に10年前と違う。その中で京都大学の学内意思が固まり、しかも事務局の応援のもとに着々と基礎が築かれている。両者の時間的因果連関は必ずしも上の通りではなかったにしても、大いに<sup>たた</sup>称えられて然るべきことだと思つのである。

北大から九大に至る旧6帝大と広島大学、それに2私立大学からの参加者を得て開かれた「大学アーカイブズに関する研究会」は熱気のコもったものだった。

名古屋大学は資料室から文書館への発展を図っている。合言葉は、「名大にLMAを！」である。言うまでもなくライブラリー、ミュージアム、アーカイブスの三つである。

昨年9月、同大学の大学史資料室が地域の行政情報関係者にも呼びかけて開いた公開講演会「『開かれた大学』とこれからの文書資料管理・情報公開」は、空前の300名近い参加者を集めた。

九州大学大学史料室折田悦郎助教授は、大学アーカイブスの必要性が年史編纂の苦勞と抱き合わせに語られることには、違和感を覚える、と言う。

確かに、いい沿革史を書くには、また百年史編纂等で集まった史料を分散させないためには、史料室・文書館の設置が必要である。だが今後、アーカイブスは新しい大学をつかっていくための、未来に向けた不可欠の機関として考えられるべきだ、というのが同助教授の主張である。

筆者も同感である。

大学アーカイブス論は、沿革史編纂始末論や歴史研究施設論ではない。大学改革論の一環として論じられ、実践されなければならない。その時期はもう来ている。

京都大学大学文書館のさらなる発展を祈るや切である。

# 大学文書館の重要性

京都大学大学院理学研究科・理学部教授 梶本 興亜

「記録を残す」という技術が生まれなければ、人類の文明がこんなに発達することは出来なかったであろう。記録を残すことによって、偉大な一個人の思想や発見・発明が万人に共有される。言葉ができ、文字が考案され、紙が作られ、印刷技術が発達し、今や情報のデジタル化によって、驚くほど多様な記録を信じられないような密度で残せるようになった。記録があることによって、我々は「全てを初めから経験する」必要が無いという恩恵を受けている。教育によって必要最小限の知識と経験を得た後は、積み上げられた遺産の「次」から出発することが出来る。このことは、個人だけでなく組織にも当てはまる。組織もまた、記録によって経験を積み上げ、現在の問題への対処と将来に向けた計画における間違いを少なくすることが出来る。人類の歴史、組織の歴史の記録は、単に物事を時系列に沿って記録したと言うだけにとどまらず、将来への重要な示唆と指針を与えることになる。ここに、文書館の基本的役割がある。

従って、大学文書館の最も基本的な仕事は、大学がこれまでに経験したあらゆることを出来る限り記録として収集し残すことである。その上で、記録を系統立て、組織の経験として役立て得る形にまとめ上げていく必要がある。まとめ方は必ずしも一様ではないので、一つの考え方で資料に軽重を付けてしまうことは戒めねばならない。このような仕事は、言うは易いが、為すのは大変な根気と労力がある。少ないスタッフで、この巨大な仕事に取り組みされていることに感嘆せざるを得ない。

大学文書館の書庫となった楽友会館1階を案内していただいた。京都の観光案内にも載っていた楽友会館のレストランが無くなった

のは寂しいが、その跡には木製の立派な書架が組み上げられ、明治の開校以来の事務文書が整然と揃えられていた。開校の頃、大正デモクラシーの頃、戦争の頃、そして戦後の教育改革の頃、どのような議論が大学で行われ、どのように予算が分配されていたのか、興味深い記録が活用を待っているはずである。金属製の書架は数十年後には錆びて保存文書に悪い影響を与えるからと、わざわざ数倍もお金をかけて木製書架にしたとのことである。文書館の方々の熱意が伝わってくる。



私が京都大学理学部化学教室の物理化学研究室に着任したのは1990年のことである。それまでは、この研究室では高圧反応の研究をしているという認識しかなかったのだが、着任して教授室に足を踏み入れたとたんに、ズッシリと重い伝統を感じた。前任の4人の教授が、教授室の額の中からじっと私を見つめていたのである。この研究室は、京都大学の母体である理工科大学が1897年に設置された際に<sup>注1)</sup>、8学科中の純正化学科の一講座として創設され、100年の伝統を持っている。従って、化学教室の第一講座と呼ばれてきた。

私の最初の仕事は研究室を片づけて自分の居場所を作ることであった。前任の方のものは全て放り出して新しい気持ちでスタートするという考え方もあるが、古いものを捨てるのが苦手な私は、書類とがらくたの中で選別に奮闘した。結局、大きな書棚3つ分にまと

めたのだが、マスクをせずに、何十年間も眠っていた書類についた埃を舞上げたので、その後1月ほど咳に悩まされるという羽目になった。残した資料の中には、大正時代からの卒業生の全卒業論文、戦前の実験データ、昭和初期からの研究室のアルバム...そして、「研究室の歌」のレコードもあった。後年、新しく来た秘書の人が、さらに整頓してくれたが、この時には、古い財布に入った数万円のお金まで出てきた。これらの資料は、いま全て、文書館に安全に保管していただくことができ、理学部化学教室の100年の歴史を考える際の貴重な資料として蘇ったといえる。

資料によると、3代目の教授であった堀場信吉先生は大きな志を持った方で、日本の物理化学を育てるために物理化学雑誌の刊行を決意されている。『物理化学の進歩』という雑誌で、昭和2年に刊行され、発刊当時は年1回の発行であった。歴史的に見ると、ちょうど、物理学の基礎として「量子力学」の形式が完成し、いよいよ化学の世界に取り入れられようとしていた時代である<sup>注2</sup>。第1巻の巻頭には、次のような文章がある。

「科学の進歩は日一日として休止する時はない。特に近時に於ける物理学及び化学の進歩は実に目覚ましいものであって科学進歩の歴史上後世から見ても現代は必ずや一つの光輝ある時代として残るだらうと思はれる。私共此の時代に於て科学の一部門の研究に身を委ねてゐる者は自分の研究が世界学術進歩の潮流に対して何様の関係があるかを絶えず注意して互いに研究上の努力が無意義のことに費やされぬように努め而して吾人の仕事が出来ただけ学術の進歩に貢献するようにせねばならぬ。」

ここからも、日本の化学界を啓発し、育てようと言う強い意気込みが感じられる。東京大学が分子の構造を物理化学研究の中心に据えたのに対して、京都大学は化学反応を中心とした方向に進もうとしていた。この研究室の雰囲気の中で育った李泰圭氏は、遷移状態理論の創始者であるHenry Eyringのところで

学んだ後、韓国に帰って、国の科学技術政策の最高指導者として活躍し、韓国化学会を創設された。こうした歴史を思うとき、100年前に研究室が創設されたときのミッションを我々がどの程度受け継ぐことが出来ているかと自省の念に駆られる。

「京都大学の学風」とよく言われる。それが如何にして醸成され、日本の文化・学問や政治にどの様に影響してきたのか。いま、その学風はどの様に受け継がれ、どのように評価されているのか。それらのことをじっくりと考えることの出来る資料が、文書館に保管されていると思う。それらの記録によって京都大学という組織が、自らのアイデンティティを確かめ、将来への示唆を受ける。それはまた、京都大学という組織を作り上げている一人一人の人間の問題でもある。折しも、大学改革が喧しく言われる時代である。大学改革は百年の計とも言うべき問題である。本当の意味で歴史に学んで、誤らぬようにしたい。時の流れに後れをとらないようにという短期的な思考でなく、百年の歴史に基づいた現状の認識をもって、より大きな視点から考えなければならない。このような時であればこそ、文書館の役割、その集める資料は重要な意味合いを持ってこよう。大学文書館の、現在と将来への重要性を認識し、支援したいものである。

注1 理工科大学は1897年に土木工学科、機械工学科が設置され、続いて1898年、数学科、物理学科、純正化学科、製造化学科、電気工学科、採鉱冶金学科が増設されて8学科となった。

注2 波動力学による量子力学形式であるシュレディンガー方程式が完成したのは、1926年であるので、その1年後にこの本が創刊されたことになる。

# 京都大学大学文書館に着任して

## この1年と今後の課題

京都大学大学文書館助手 保田 その

はじめに

私は、昨2001年4月に京都大学大学文書館に助手として着任した。しかし当時の私が大学文書館に対して持っていたイメージは、京都大学百年史編集の副産物としてできた資料室という程度のものであり、資料を整理しながら研究にも使うのだということを考えていたに過ぎなかった。

それから1年を経た今も、大学文書館の助手としてなすべきことは何かと模索している状態であるが、パンフレットやホームページの作成、移管された行政文書の整理作業、勉強会、他施設の訪問などを通じて、大学文書館のあり方や今後の課題について考えるようになってきた。ここでは1年間の主な活動とそれを通じて考えてきたことをまとめてみたい。

広報活動から始まった1年

私たちが、かなり早い時期に大学文書館の業務として行ったのは、パンフレットとホームページの作成であった。学内外に存在を知らせ、事務組織には行政文書の移管を、教職員や元教職員、卒業生には個人資料の提供を呼びかけるための広報活動である。

ここではまず大学文書館がどのような資料を対象とするのかを示さなければならない。特に具体例として何を示すか、何の写真を出すかが難しい課題であった。具体例や写真は、大学文書館が何を集めようとしている機関であるのかについて、意図した以上に強いイメージを与えることがあり得る。

たとえば明らかに歴史的に貴重な文書を中心に示すことにより、閲覧者を増やすことにはつながるだろうが、文書を移管する事務組織に対して、また資料の提供を考えている個人や団体に対しては、それぞれが持っておられる文書、資料の重要性を気付いていただき

にくくなることが考えられる。また逆にドッチファイル入りの行政文書を中心に示すと、事務職員に対するアピールにはなっても、行政文書になじみの薄い一般の教員や学生に対して大学文書館の必要性を知ってもらうことが難しくなる。



思い返せばパンフレットの作成に取り掛かった時点では、どのような資料を強調して示すべきかという方針が明確ではなく、古くて貴重そうなものを表に出そうという程度であった。その後パンフレットやホームページの案を練る中で、何を前面に出すことで何が隠れるのか、誰に向けたアピールが重要であるのか、といったことを考えるようになってきたと思う。

今後、特に時計台記念館での本格開館に際しては、誰に何をアピールするのかを、今以上に検討する必要があると考えている。

行政文書の搬入と整理作業

さて、以上のようにパンフレットやホームページにおいては「行政文書の移管」を呼びかけていたが、私が実際に「行政文書」を扱うようになったのは、11月に事務局の行政文書が楽友会館の書庫に搬入され、その整理、照合作業にあたるようになってからであった。私たちは12月から3月にかけて、業者によって搬入された文書を掛、分類によって並べ替える作業を行った。幸いにして天災や空襲による被害を受けていない京都大学には、明治期からの文書が残っている。その形態は和綴か

らドッチファイルまで時期によって変化しており、紙質や綴の変遷からも、大学が経てきた歴史が伝わってくる。

この作業を通じて、大学院生時代にはなじみのなかった大学の事務組織の業務やそこで作成される文書について認識するようになり、さらに文書が100年に亘って作成され続けてきたことの重み、そして現在の文書を次々に伝えるという責任の重みを強く感じた。

現在は、この文書を目録と照合する作業を行っているところであり、次の課題は、文書群を反映した形を目録、データベースをどのように作成していくかということである。

大学文書館の役割とは何か

先に述べたような業務に加えて、私たち教員3名は、文書館学・記録史料学の研究動向を検討しながら、大学文書館の役割とは何か、アーカイヴズとは何か、さらに選別廃棄や目録作成はいかに行うべきか、といったことに関して議論を重ねてきた。また各地の公文書館や史料館等を見学し、現場の職員の方からお話を伺うということもしてきた。

その中で、アーカイヴズのあるべき姿に関しては、定説といえるものが未だないこと、そして多くのアーカイヴズの施設において、理念と現状の間に大きな隔たりがあることなどに気付いた。これは今後の京都大学大学文書館にとって避けて通れない問題であり、行政文書移管規程等の制度面がかなり整備された今、それをいかに運用していくのかという指針を立てることこそが、私たち教員に求められる課題である。

今後大学文書館は、一方ではその役割や対象とする資料の範囲に関して柔軟に考え、可能性を広げるとともに、また一方では、大学文書館の理念とは何か、役割とは何かについて議論を重ねることが不可欠である。現在のところ、大学文書館が対象とする資料に関しては、理念として「機関としての大学の営みを示す資料」を対象とするという方針での議論を深めているところであり、今後は「機関としての大学」とは何か、その歴史をいかに蓄積するべきか、といったことを

考えていく必要があるだろう。

そのためには、移管、提供されて蓄積されつつある文書、資料のそれぞれが、機関としての京都大学の営み、そしてその歴史においてどこに位置付けられるのかということを常に確認しなければならない。保存年限の過ぎたものがすべて移管されるようになった行政文書に関しては、選別 - 廃棄の基準を定めることが重要な課題であるが、ここにおいてもそれぞれの文書が大学の営みの何を記したものであるのかを知ることが重要である。

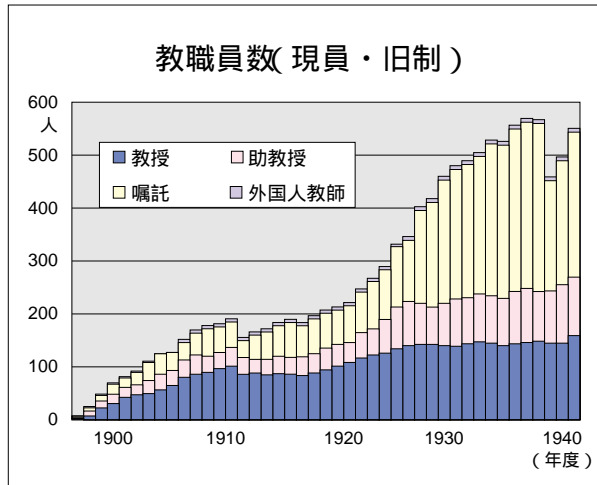
他方で、個人や団体に保管されている資料を受入れることも重要な課題である。各時代の条件の下で研究や教育に取り組んだ教職員や学生の歴史は、個人の歴史であると同時に、京都大学という機関の歴史を構成するものでもある。大学における研究や教育などが、組織的というよりもむしろ研究者、教育者、学生としての個人的な営みの形で行われていること、そしてその営みの蓄積こそが大学の機関としての営みを形作っていくことを考えれば、個人や団体によって蓄積された資料が貴重なものであることはいうまでもない。このような資料は、行政文書のように組織的に移管されるという性質のものではなく、研究室や自宅で保管されていたものをご好意により提供いただいている。だが、単に古いものを集めるというだけの姿勢ではなく、それぞれの資料を京都大学の歴史のなかに位置付け、常に機関と構成員との関係について考えるという姿勢が求められるだろう。

おわりに

現在の私は、行政文書を目録照合、データベース作成などに忙しい日々を送っている。今年度はこのほかにも、展示計画の具体化、選別基準の検討など、本格開館に向けてなすべき課題が山積している。この1年間が今後の大学文書館の方向を決めるのだということを肝に銘じて、これらの課題に取り組んでいきたいと考えている。

## データで見る京都大学の歴史

# 教職員数の変遷



『京都大学百年史』資料編3、p402～448より作成。元のデータは、「旧制」が『文部省年報』の各年度版、「新制」が『京都大学概要』の各年度版であり、1999年度以降に関しては、『京都大学概要』を直接参照している。

なお、1911(M44)年の教員数減少は、福岡医科大学が九州帝国大学医科大学として分離したためである。

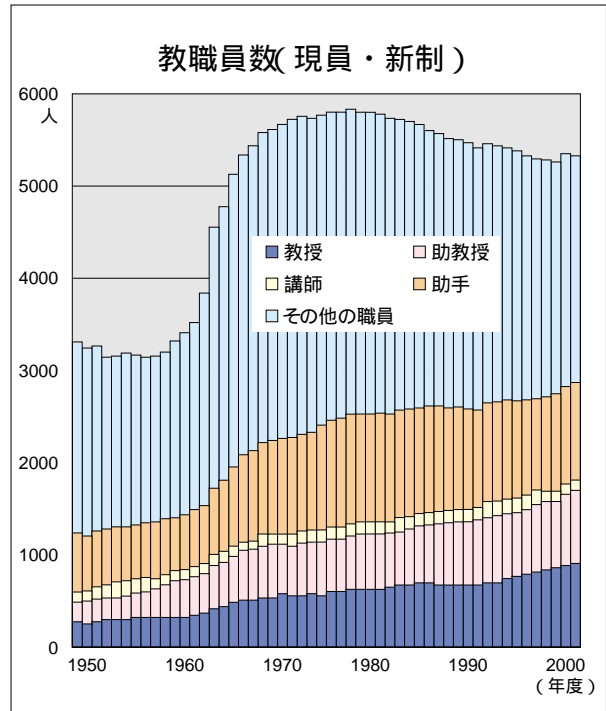


表1 学部等別の教員(教授・助教授)数 (単位 人)

学部等	年度	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
		(M33)	(M43)	(T9)	(S5)	(S15)	(S25)	(S35)	(S45)	(S55)	(H2)	(H12)
総合人間学部	教授											70
	助教授											49
文学部	教授		16	27	17	24	25	35	33	33	34	51
	助教授		5	5	12	10	11	20	22	23	25	26
教育学部	教授							10	10	11	11	17
	助教授							10	12	9	10	14
法学部	教授	10	17	14	17	14	17	20	30	29	31	41
	助教授	2	6	4	10	13	5	21	9	11	14	8
経済学部	教授		8	9	10	12	16	16	13	24	28	
	助教授		2	4	10	6	13	11	14	12	11	
理科大学	教授	15	28									
	助教授	12	13	1914(T3)年に理科大学と工科大学に分離								
理学部	教授		15	26	26	32	37	60	71	60	78	
	助教授		7	11	21	25	49	66	59	68	67	
医学部	教授	8	22	20	23	28	32	30	34	34	38	54
	助教授	4	11	10	19	20	28	35	32	40	32	43
薬学部	教授						7	13	13	13	16	
	助教授						7	13	13	13	15	
工学部	教授		25	32	37	55	69	139	146	138	138	
	助教授		11	20	24	49	64	120	115	124	122	
農学部	教授		21	28	28	33	53	57	65	66		
	助教授		11	17	25	35	46	53	60	59		
教養部	教授					25	43	70	77	86		
	助教授					45	65	99	98	102		
その他(独立研究科、附置研究所、センター、学部附属施設など)...	教授				24	54	116	150	186	349		
	助教授				46	71	125	158	201	307		
併設学校	教授	2					12		10	17	17	
	助教授						7		13	20	14	

表2 学部別の教員(教授・助教授)一人当たり学生数 (単位 人)

学部	年度	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
		(M33)	(M43)	(T9)	(S5)	(S15)	(S25)	(S35)	(S45)	(S55)	(H2)	(H12)
文学部			6.8	4.6	31.2	14.0	30.6	14.0	14.9	13.8	14.2	12.6
教育学部							7.4	8.6	9.7	10.0	10.5	
法学部		8.0	10.0	14.4	63.6	52.9	60.5	15.2	19.6	18.3	20.9	20.4
経済学部				24.8	60.3	46.1	55.4	17.1	19.0	18.1	19.1	20.5
理科大学		6.6	6.7									
理学部			4.5	8.8	5.9	10.3	6.1	9.0	8.6	10.5	12.5	
医学部		2.9	10.0	13.8	16.1	16.1	14.3	9.1	7.1	9.8	13.6	11.3
薬学部							9.9	11.0	10.1	11.4	13.2	
工学部			8.9	11.6	13.6	13.0	9.7	11.8	12.3	13.8	14.5	
農学部				11.1	8.2	13.2	7.1	9.8	9.1	9.6	12.8	

算出に用いた学生数は次の通りである。

1940年度以前...各学部の学生数(生徒、大学院生は含まない)

1950年度以降...3年次以上の学生(2年度前、3年度前までの入学者数で代用)と大学院生(修士・博士)の合計。

医学部に関しては、専門課程に在学中の学生と大学院生の合計。

なお、教員が全学部の1、2年次学生の教育を中心に受け持つ総合人間学部については、適切な値を出すことが困難であるため、省略した。

1...戦前期にも附置研究所などはあったが、現員の教員数に関するはっきりとしたデータがないため省略した。

2...1950年度時点での併設学校は附属医学専門部(1951年度までで廃校)、1980年度以降の併設学校は、医療技術短期大学部(1975年度開校)である。

なお、1919年以前においては、文学部は文科大学、法学部は法科大学、理学部は理科大学、医学部は医科大学、工学部は工科大学という名称であった。



教職員数の変遷を図に示した。旧制、新制とも教授、助教授の数は伸びが緩やかで安定しており、変動が大きいのは、旧制では「嘱託」(多くが講師であると思われる)、新制では「助手」と「その他の職員」(事務職員)のほうである。なお、旧制の事務職員数に関するデータははっきりしたものが見当たらず、文部省年報に示されている人数も不確かな面があるため掲載は控えた。

次に、学部別の教授・助教授数を表1に、教員一人当たりの学生数を表2に示した。文系学部、特に法学部や経済学部においては、学生数が大幅に増加した1930年と、戦後まもなくの時期である1950年において、教員一人当たりの学生数が多くなっていることがわかる。

この値は、しばしば大学教育の水準を示す指標として用いられるが、直接には学部学生を受け持たない教員(附置研究所、センターなど)の存在や、学生の就学形態の多様さといったことを考えると、正確な算出は難しく、単純な数値によってのみ判断するのは避けるべきである。それでも、教員数と学生数の動きを各学部の講義スタイルの変遷などとの関連で見るのは興味深いだろう。

『京都大学大学文書館だより』第1号の「データで見る京都大学の歴史 学生数の変遷」のグラフ内に、「旧制の学生が最後に卒業したのは1953(昭和28)年」とありますが、旧制学生は、1953(昭和28)年度の卒業が最後となり、旧制学生に対する最後の卒業式が挙行されたのは1954年3月24日です。なおそれ以降留年の旧制学生は、新制の学籍に編入され、新制への全面的移行が完了しました。おわびして訂正いたします。

(大学文書館助手 保田 その)

## 大学文書館の動き

### 「大学アーカイブズに関する研究会」を開催しました

2月20日から21日にかけて「大学アーカイブズに関する研究会」第1回「国立大学におけるアーカイブズのあり方 理念と実態」(於京都大学楽友会館)を開催しました。

この研究会は、これからの大学アーカイブズのあり方や役割などを研究することを目的に開かれたもので、今回は、情報公開法との関係も視野に入れ、とくに国立大学の史(資)料室に所属されている方、年史編纂を担当されている方を中心にお集まりいただきました。20日の基調報告では、九州大学大学史料室の折田悦郎助教授による「大学アーカイブズの設置とその機能」、京都大学大学文書館の保田その助手による「京都大学大学文書館の1年と今後の課題」が発表され、21日には参加いただいた各大学における史(資)料室の今後の可能性や行政文書の管理状況などに関する報告が行われました。大学アーカイブズとしての理念や、実践していくべき活動などについて活発に議論され、またこうした問題について継続的に協力し研究していくことが確認されました。

この研究会は今後も3年を目途に、年2、3回のペースで行い、最終的にはその成果を公表することを予定しています。

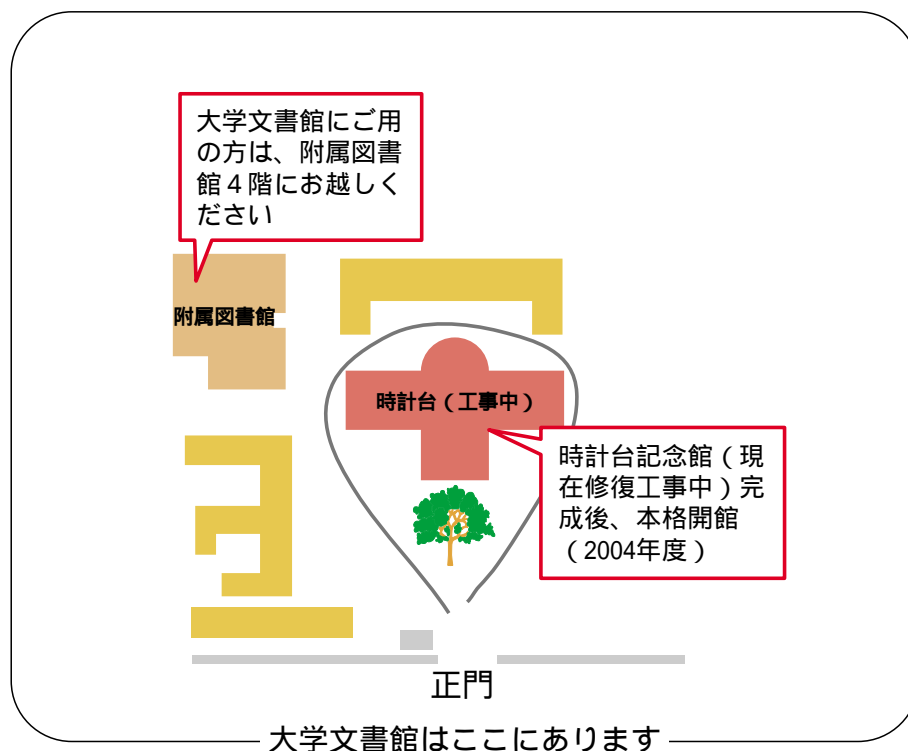


## 〔日誌〕(2001年11月～2002年3月)

- |  |   |
|--|---|
| <p>2001 / 11 / 6 大学文書館教官会議。</p> <p>11 / 7 西山助教、全国歴史資料保存利用<br/>機関連絡協議会(全史料協)総会・全<br/>国大会に出席(於長野県若里文化<br/>ホール、～8日)。</p> <p>11 / 12 西山、京大天皇事件被処分者有志主<br/>催「京大天皇事件を語る会」に参加。</p> <p>11 / 19 西山、田中秀央元文学部教授関係資<br/>料について調査のため出張(於大阪<br/>府箕面市)。</p> <p>11 / 20 北海道立文書館より、京都大学大学<br/>文書館の仕組みや他大学の大学アー<br/>カイヴズ等について照会。</p> <p>11 / 22 東京大学社会情報研究所より、大学<br/>文書館の仕組み等について照会のため<br/>来館。</p> <p>11 / 28 西山・嘉戸助手・保田助手、秋田県<br/>公文書館、宮城県公文書館、東北大<br/>学史料館へ出張(～29日)。</p> <p>11 / 30 『京都大学大学文書館だより』第1<br/>号、発行。</p> <p>12 / 4 大学文書館教官会議。</p> <p>12 / 5 西山、立命館大学国際平和ミュージ<br/>アム展示「平和の世紀へ 遺書・遺品<br/>展」見学のため出張。</p> <p>12 / 11 創価大学創価教育研究所より、大学<br/>文書館設置の経緯、行政文書の受け<br/>入れ手順等について照会のため来<br/>館。</p> <p>12 / 19 西山・嘉戸、北海道立文書館、北海<br/>道開拓記念館へ出張(～20日)。</p> <p>12 / 21 保田、九州大学大学史料室、熊本大<br/>学五高記念館へ出張(～22日)。</p> <p>12 / 22 西山、柳原英元医学部教授関係資料<br/>について調査のため出張(於広島県<br/>呉市)。</p> <p>12 / 26 毎日放送、法経第一教室について取<br/>材のため来館(27日夕方「VOICE」<br/>で放送)。</p> <p>2002 / 1 / 10 大日本印刷年史センターより、大学</p> | <p>文書館の設置の経緯、業務等につい<br/>て照会のため来館。</p> <p>保田、史料情報共有化システム公開<br/>研究会(於国立国文学研究資料館史料<br/>館)に参加。</p> <p>1 / 17 大学文書館教官会議。</p> <p>1 / 24 西山、大阪府公文書館へ出張。</p> <p>1 / 30 西山・保田、滋賀県立琵琶湖博物館<br/>へ出張。</p> <p>1 / 31 国立国文学研究資料館史料館より、<br/>大学文書館の現状等について照会の<br/>ため来館。</p> <p>2 / 5 NHKエンタープライズ21より、ノー<br/>ベル賞関係の番組制作の調査のため<br/>来館。</p> <p>2 / 6 西山・保田、国立歴史民俗博物館へ<br/>出張。</p> <p>2 / 7 内山勝利文学研究科教授より、第三<br/>高等学校関係資料(アルバム)寄贈。</p> <p>2 / 8 西山、広島県立文書館へ出張。<br/>西山・岸本総務課課長補佐、広島大<br/>学50年史編集室第13回研究会におい<br/>て「大学におけるアーカイヴズとは<br/>京都大学大学文書館の設置<br/>」と題して講演。</p> <p>2 / 9 柳原勉氏より、柳原英元教授関係資<br/>料寄贈。</p> <p>2 / 13 西山・嘉戸、埼玉県立文書館、日本<br/>新聞博物館へ出張(～14日)。</p> <p>2 / 20 大学アーカイヴズに関する研究会第<br/>1回「国立大学におけるアーカイヴ<br/>ズのあり方 理念と実態」開<br/>催(於京都大学楽友会館、～21日)。</p> <p>2 / 25 大学文書館教官会議。<br/>医学部庶務掛より、医学部関連の写<br/>真について照会のため来館。</p> <p>2 / 26 西山・保田、香川県立文書館、香川<br/>県歴史博物館へ出張。</p> <p>3 / 7 国立国語研究所より、大学文書館設<br/>置の経緯、業務等について照会のため</p> |
|--|---|

- め来館。  
 西山、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館へ出張(～9日)  
 3/13 国立国文学研究資料館史料館より、大学文書館の現状・設備などについて照会のため来館。  
 3/15 金沢大学より、大学文書館の設置の経緯、業務等について照会のため来

- 館。  
 3/19 大学文書館運営協議会。  
 3/20 西山・岸本、九州大学大学史料室へ出張。  
 3/23 西山、田中秀央元文学部教授関係資料について調査のため出張(於京都市左京区)。



## 資料提供のお願い

大学文書館では、京都大学の歴史や学生生活などに関係する史料を収集しています。

ご協力いただける場合は、下記までご連絡ください。

Tel : 075-753-2651

Fax : 075-753-2025

E-mail : [archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp)

# ある回想

- 「戦後大学改革」をめぐる -

京都大学大学文書館助教授 西山 伸

敗戦直後の1945(昭和20)年11月に総長に就任し、京大のいわゆる戦後改革を主導した鳥養利三郎が、自らの総長時代の思い出を座談会形式で語った『敗戦の痕』という出版物(非売品)がある。その中で、鳥養が次のように語っている箇所がある。

イールス博士については、私がよく知っています。実に好人物でしたが、政治感覚に欠けていたように思う。正直過ぎるというのでしょうか。この人が(中略)学制改革に関する演説をした。「日本では国立大学は、十校あればよい。それ以上置く必要はない。その十校というのは七帝大をそのままにして、そのほかに新に三大学をつくるという意味である。現在の七帝大以外の単科大学はすべて地方に移譲する。」というような意味であったので、騒ぎが持ち上がり、文部省はあわてるし、蔵前(東京工業大学のこと - 筆者注)だの、一橋あたりは、地方移譲になるというのだから、猛烈な反対運動が起こった。また同時に、三つの新增設大学の争奪戦。熊本、広島、岡山、金沢、等々が、いきり立った。その上代議士連中が暗躍し始めて遂に、政治問題に発展し、何とも押さえ切れなくなったものだから、最後には各府県に一枚ずつ国立大学を置く、ということになってしまった。これが今日、大学が、こんなに多くなった原因の一つなのである。全くイールス氏の誤算といえよう。(64頁)

ここでいうイールスとは、連合軍司令部の民間情報教育局(CIE)の顧問として来日していたウォルター・イールスのことである。彼は、この少し後の1949年、大学におけるレッドパージ(共産主義者の職場からの追放)を唱えて大問題となった「イールス事件」の主役でもあった。

それにしても、「大学改革」が次々と進行し、ついには国立大学の統合も現実の問題となってきた昨今の視点からすると、何とも生々しい史料ではある。

実は、戦後改革の過程で、高等教育の大部分を地方に移譲する案が説かれたことがあるというのは、教育史ではよく知られた事実である。1947年の末頃のことであり、鳥養の発

言もそのことを指すものと推測される。このときには、大学基準協会や当時教育改革を議論していた教育刷新委員会において、大学の全国的な意義や当時の地方の財政状況などから地方移譲に反対の意見が出され、立ち消えになった経緯があった。

しかし、それによって激しい大学の争奪戦が展開されて政治問題化したということはこれまで関係大学の沿革史(例えば『東京工業大学百年史』や『一橋大学百二十年史』)などには書かれておらず、ましてやその混乱が一府県一大学を呼び込んだなど、筆者には全くの初耳であった。この史料そのものが後の時代から振り返ったものであり、内容についてはかなりの留保を付さなければならないのは間違いない(ところが、近年発行された『岡山大学五十年小史』には、地方移譲計画への反対とともに、岡山への「中国総合大学」の誘致運動の経過が詳細に記述されている。今後新たな事実が発掘されていくかも知れない。)

話を鳥養の回想に戻すと、大学をつくりすぎたと認識していた鳥養は、同じ本の中かで「これを救う道は、現在の大学の大部分を職業教育の場としてしまっ、少数の大学だけを、スーパー大学すなわち、上級の大学にするよりほかに手が無いのではないか」「それを二十校くらいに厳密に制限してしまうぐらいの勇氣を出さないとだめだと思います」とも述べている(69、70頁)。何だかこれもどこやらで聞いたような話である。

果たして鳥養は「先見の明」を持っていたのか、単なる復古主義者なのか。大学基準協会副会長や教育刷新委員会委員等、京大だけでなく当時の大学政策全般にも関与していた鳥養の回想は、戦後の「大学改革」をとらえ直すひとつの手がかりになるかも知れない。